

中津藩は、前野良沢から福沢諭吉に至るまで、多くの蘭学者を輩出し、日本の洋学の近代化の為に多大な貢献をした藩である。

中津藩主三代目・奥平昌鹿（1744～1780）は母の骨折を長崎の蘭方医吉雄耕牛が見事に治療したことから、蘭学に興味を抱いた。明和七年（1770）、藩医の前野良沢を中津に連れて帰り、長崎に留学させた。良沢は、藩主の期待に応え、オランダ語で書かれた解剖書『ターヘル・アナトミア』を杉田玄白等と翻訳し、蘭学の開祖となった。その成果は安永三年（1744）、杉田玄白、中川淳庵等により『解体新書』として出版され、近代医学の発展に大きく貢献した。

中津藩主五代目・奥平昌高（1781～1855）は、薩摩藩・島津家からの養子であり、実父島津重豪（1745～1833）とともにシーボルトとの親交を深め、自らもオランダ語を学んだ。文化七年（1810）に、日本で最初の和蘭辞書『蘭語約撰』を、文政五年（1822）には日本で三番目の蘭和辞書『中津バスタード辞書』を出版し、蘭学の普及に努めた。これらの辞書に関与した蘭学者は、前者は神谷弘孝、後者は大江春塘（1787～1844）である。二冊の辞書は併せて「中津辞書」とも称され、日本各地で活用されたのみならず、出島やオランダのライデン大学で日本語を学ぼうとするオランダ人にも、大いに利用された。文政二年（1819）、昌高は、藩医村上玄水（1781～1843）による九州で史料が残る最初の人体解剖を許可した。玄水は、解剖の詳細な記録を『解臍記』として残し、生家は、三〇〇〇点の医学史料を蔵する「村上医家史料館」として、中津市諸町に保存公開されている。

嘉永二年（1849）、辛島正庵を筆頭とする中津の医師十名は、長崎に赴き、バタビア（現ジャカルタ）由来の痘苗を入手し、中津に持ち帰って種痘を実施し成功した。この年は種痘元年ともいわれ、日本で最も早い時期の成功であった。なお、では、種痘を含めた四〇〇点を越す医学史料が発見されている。種痘の成功により、多くの子供の命が救済された。この事に感動した住民からのボランティアにより、文久元年（1861）、勢留に「医学館」が設立され、種痘所としても大いに活用された。明治に入り「医学館」は、奥平家が、年に米二百二十五俵を提供して、西洋医学の必要性から「中津医学校」へと発展的に改称された。

明治四年（1871）中津医学校校長に就任した大江雲澤（1822～1899）は“医は仁ならざるの術、努めて仁なさんと欲す”という医訓を示し、外科医としてのみならず、教育者としても、優れた業績を残した。市内鷹匠町にある大江家からは、世界で始めて全身麻酔による手術に成功した華岡青洲の肖像画や多数の華岡流外科手術図が発見された。その他に『解体新書』や『重訂解体新書』なども発見されている。当時の中津藩から華岡塾の大阪分塾に五名の医師が派遣され、学んでいたことが明らかになった。前野良沢を生んだ蘭学研究の流れが、幕末に至ってもなお続いていたことが伺える。

中津出身の外科医として、陸軍・医学校校長を務めた田代基徳（1839～1898）がいる。松本良順（1832～1907）等と医学会の前身である「医学会社」を起したり、『外科手術』や『医事新聞』を発行するなど幅広い活動を行った。基徳は、大阪にある緒方洪庵の適塾に学んだ。そこでは中津から福沢諭吉をはじめ十一人が学び、幕末の中津藩蘭学に大きな影響を及ぼした。基徳の養子田代義徳（1864～1938）は初代東大教授に就任し、整形外科の開祖にふさわしい活躍をした。さらに、日本の歯科学の開祖小幡英之助（1850～1909）や近代医学史上に残る心臓の刺激伝導系の発見者田原淳（1873～1952）など中津には次々と医歯学のパイオニアが出現した。洋学史上に残る中津人の活躍した背景には、藩を挙げて蘭学に取り組み、学ばせた藩主のリーダーシップがあったと考えられる。時代に対して先見の明があり、人材育成を怠らなかった中津藩の仕上げは、福沢諭吉によって行われた。諭吉は自ら蘭学を学んだことで、前野良沢達が翻訳を成し遂げた苦勞を顕彰する為、杉田玄白が晩年著した『蘭学事始』を、明治二年（1869）に復刻させた。その序文の中で諭吉は「良沢達パイオニアの苦勞は涙無しには語れない」と述べている。

中津城には中津の「蘭学の光芒」を示す史料が数多く展示されている。

平成十六年三月十三日 除幕

中津ロータリークラブ

中津中央ロータリークラブ

中津平成ロータリークラブ